異なるサンプルを多数つくり、パソコン上のソフトで判定するための計算式をつくった。

機械や制御システムなど多方面の専門技術が必要となるため、同財団の3人の職員が共同研究。とち財団にないソフト面のノウハウなどは、道総研工業試験場（札幌）の協力を得た。

道の補助金も得て、今年は意図的につくったサンプルではない実際の生乳での検査を試験し、来年以降はメーカーも交えての試作も視野に入れる。田村主幹は「集荷現場で生乳を検査できる装置は世界的にもないと聞く。十勝の生乳の品質保証体制が拡充される」と、2年後の実用化を目指している。

農業ガイド1009号

2015年5月23日

納豆大豆に耐病性 「中育69号」を開発 道総研

道立総合研究機構（道総研）は納豆用大豆の新品種「中育69号」を開発した。道産納豆用大豆の約半分を占める「スズマル」にダイズシストセンチュウへの耐病性を備えたことで、安定生産に大きく寄与すると期待されている。スズマルと全面置き換えがされる予定で、2016年度から一部で取り入れられ、17年度から本格的な栽培が始まる見込み。

北海道では納豆用大豆の作付面積は5000～6000ヘクタールで、そのうち半分程度が「スズマル」が占める。スズマルは納豆加工適性に優れ、実需者からの評価が高い。しかし、ダイズシストセンチュウへの抵抗性を持っておらず、道央部を中心に被害が問題となっていた。

そこで、スズマルと同等の納豆加工適性を持つとともにセンチュウへの抵抗性も備えた新品種の育成が強く求められ、2007年から道総研中央農業試験場で育成を進めてきた。15年2月に完成した。

「中交1900F1」を母、スズマルを父として人工交配を行い、その後、DNAマーカーでセンチュウ抵抗性の遺伝子型を選抜しながら、スズマルを計6回戻し交配した。

加工性変わらず、安定生産に期待

中育69号はダイズシストセンチュウレース1とレース

3に抵抗性を備え、納豆加工適性や成熟期などはスズマルと同等の特性を持つ。粒はスズマルより若干小さく、百粒重もやや軽い。ただ、ダイズシストセンチュウレース2に対しては抵抗性を持たないので注意が必要となり、連作や短期輪作を避けることなどが大切になる。

普及対象地域は道の大豆栽培地帯区分3（十勝中央部、上川中南部、日高、羊蹄山麓を除く後志）と地帯区分4（空知、石狩、胆振東部・西部、渡島北部）とこれに準ずる地帯。普及見込み面積は全道で2500ヘクタール。

道総研十勝農業試験場豆類グループの品田博史さんは「安定生産が可能となり、業者にとっても、生産者にとっても大きな効果が期待される」と話している。

農業ガイド1014号

2015年6月27日

センチュウ対策 期待の2品種 十勝で新ジャガイモ開発

十勝管内の2研究機関が、道内で感染が広がっている重要病害「ジャガイモシストセンチュウ」に抵抗性を持ったジャガイモの新品種を開発した。カルビーポテト（帯広市）のポテトチップス用、北海道農業研究センター（北農研）芽室研究拠点のでんぷん原料用の2種類で、今年の道の農作物優良品種にそれぞれ認定され、道内の農業関係者から普及が期待されている。

◆チップス用「ぼろしり」 カルビーポテト

カルビーの原料部門を担う関連会社カルビーポテトは、加工用品種「ぼろしり（CP07）」を開発。現在、農林水産省の品種登録も出願している。

現在、全道で約7000ヘクタール作付けされている加工用の主力品種「トヨシロ」は、シストセンチュウに抵抗性がなく、新品種の育種が急務となっていた。ジャガイモの育種は10年以上の年月がかかり、ぼろしりも親とな

る品種が交配されたのは2003年。1万粒以上の種を育て、その中から8年間かけて優れた特徴を持つ株を選んだ。

その後、加工適性を調べる試験や全道での栽培試験を経て、道優良品種に認定。育種を担当した同社「馬鈴薯研究所」（芽室町）は1985年に設立され、海外から導入した品種が優良品種に登録されたことはあったが、一から育種した品種の認定は初めて。